パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して (XLII)

竹　下　春　日

〔XX〕 19哲学者たちの考え——285, 286, 287, 288, 289, 292, 293, 294 (53), 295(52), 296, 297, 298, 303(20), 394(27)。

(1) La. 285-Br. 525 について。——《哲学者は，二つの状態のどちらにも適合した感情がどういうものか，教えてくれなかった。／偉大さなら偉大さだけの感情の動きは教えこんでくれるのだが，人間の状態はそんなものではない。／下劣さなら下劣さだけの感情の動きは教えこんでくれるのだが，人間の状態はそんなものではない。／身を低めようとする感情の動きは大切だが，自然のままにではなく，悔改めによって果たされるものでなくてはならない。そこに甘んじているためではなく，偉大へと向うものでなくてはならない。身を高めようとする感情の動きも大切だが，身分の功績によるのではなく，恩寵によるものでなくてはならず，一たん，低い所をくぐりぬけてきたものでなくてはならない。》(Les philosophes ne prescrivaient point des sentiments proportionnés anx deux états. / Ils inspiraient des mouvements de grandeur pure, et ce n'est pas l'état de l'homme. / Ils inspiraient des mouvements de bassesse pure, et ce n'est pas l'état de l'homme. / Il faut des mouvements de bassesse, non de nature, mais de pénitence ; non pour y demeurer, mais pour aller à la grandenr. Il faut des mouvements de grandeur, non de mérite, mais de grâce, et après avoir passé par la bassesse.)

この断章の内容は，《哲学者たち》(les philosophes) の所説に対する批判と教導にかんするものであるから，当然19の「哲学者たちの考え」の項目に属する。

(2) La. 286-Br. 465 について。——《ストア派は言う。「あなた自身の中に帰りなさい。そこにこそ，あなたの安らぎが見出されるであろう」と，だが，これは正しくない。／ほかの人たちは言う。「外へ出なさい。気ばらしをすることによって，幸福を求めなさい」と。だが，これも正しくない。病気になるかもしれない。／幸福は，わたしたちの外側にも，内側にもない。幸福は，神の中にある。わたしたちの外側であり，内側である所にある。》(Les stoïques disent : 《Rentrez au dedans de vous-mêmes ; C'est là où ovus trouverez votre repos.》 Et cela n'est pas vrai. / Les autres disent : 《Sortez en dehors : recherchez le bonheur en vous divertissant.》 Et cela n'est pas vrai. Les maladies viennent. / Le bonheur n'est ni hors de nous, ni dans nous, il est en Dieu, et hors et dans nous.)

この断章の冒頭には，古代ギリシャの一学派である《ストア派》(les stoïques) の幸福論が掲げられているので，かつまた別の思想家たちを指すとおもわれる《ほかの人たち》(les autres) の意見も述べられているので，この fr. は「19哲学者たちの考え」のうちに分類しうることになる。

(3) La. 287-Br. 395 について。——《本能・理性——わたしたちには，証拠を示すことは不可能である。どんな独断論をもってしても，この点はうち破れない。わたしたちには，真理の観念がある。どんな懐疑論をもってしても，この点はうち破れない。》(*Instinct. Raison.*——Nous avons une impuissance de prouver, invincible à tout le dogmatisme. Nous avons une idée de la vérité, invincible à tout le pyrrhonisme.)

この叙述中には，《独断論》(le dogmatisme) および《懐疑論》(le pyrrhonisme) という哲学思想が見出されるので，この断章が19の「哲学者たち

の考え」のうちに分類しうることは，論を俟たない。

（4） La. 288-Br. 220 について。——《霊魂の不死について論じなかった哲学者たちのあやまり。モンテーニュに見られるかれらの両刀論法のあやまり。》(Fausseté des philosophes qui ne discutaient pas l'immortalité de l'âme. Fausseté de leur dilemme dans Montaigne.)

この fr. が19の分類項目に入るのは，言う迄も無く，《哲学者たち》(philosophes)・《モンテーニュ》(Montaigne) の語が見出されるからである。

（5） La. 289-Br. 378 について。——《ピュロンの説——あまりに才知に長けていると，あまりに才知が足りなすぎるのと同じように，愚かなことという非難を受ける。中庸ほど，よいものは何もない。多数の人々が，そう決めたのである。人々は，どちらの端を通ってにせよ，中庸からぬけ出そうとする者の悪口を言う。わたしは，中庸を固執する者ではないが，中庸になら身を置いてもよいと思う。ただし，下の方の端にいるのはいやだ。それが，下の方だからではなく，端だからである。同じように，上の方の端に置かれるのも，おことわりしたい。中間からぬけ出すことは，人間性からぬけ出すことである。／……》(*Pyrrhonisme.*——L'extrême esprit ets accusé de folie, comme l'extrême défaut. Rien que la médiocrité n'est bon. C'est la pluralité qui a établi cela, et qui mord quiconque s'en échappe par quelque bout que ce soit. Je ne m'y obstinerai pas, je consens bien qu'on m'y mette, et me refuse d'être au bas bout ; car je refuserais de même qu'on me mit au haut. C'est sortir de l'humanité que de sortir du milieu. / ……)

この断章は，《ピュロンの説》(Pyrrhonisme) を極端なるものとして，《中庸》(la médiocrité) を尊ぶパスカルの立場から，批判したものである。ピュロン派は，言う迄もなく古代懐疑論の代表的学派であるからして，この fr. は「19哲学者たちの考え」に所属している。

（6） La. 292-Br. 219 について。——《霊魂は死すべきものか，不死なのかということによって，倫理がはっきり二つに別れてくることは間違いない。それにもかかわらず，哲学者たちは，このこととかけ離れてその倫理を築き上げようとした。かれらは，一時間の暇つぶしをすることの思案に明け暮れている。／キリスト教へのそなえをさせるために，プラトンを。》(Il est indubitable que, que l'âme soit mortelle ou immortelle, cela doit mettre une différence entière dans la morale. Et cependant les philosophes ont conduit leur morale indépendamment de cela : ils délibèrent de passer une heure. / Platon, pour disposer au christianisme.)

この断章は，《哲学者たち》が，霊魂不死の問題と倫理観の問題とを切り離していること，に対する批判を述べている。それゆえ哲学者の意見を対象としている限り，19の分類項目に妥当する。

（7） La. 293-Br. 394 について。——《ピュロン派，ストア派，無神論者など，すべて彼らの原理としているところは，正しい。しかし，その結論は，間違っている。それは，反対の原理もまた正しいからである。》(Tous leurs principes sont vrais, des pyrrhoniens, des stoïques, des athées, etc. Mais leurs conclusions sont fausses, parce que les principes opposés sont vrais aussi.)

この文中の《ピュロン派，ストア派，無神論者》(des pyrrhoniens, des stoïques, des athées) は，すべて古代の哲学的思想家たちの形成する学派であるので，分類項目上当然「19哲学者たちの考え」に入る。

（8） La. 294 (53)-Br. 391 について。——《会話——大そうな言葉。宗教なんてものは，認めない。／会話——ピュロンの説は，宗教に役立つ。》(*Conversion.*——Grands mots : la religion, je la nie. / *Conversion.*——Le pyrrhonisme sert à la religion.)

この叙述中には，《le pyrrhonisme》の語が出ているので，前出の断章と

同様，この断章 (La. 294-Br. 391) は，19の「哲学者たちの考え」のうちに所属する。

(9) La. 295 (52)-Br. 432 について。——《ピュロンの説には，真実がある。つまり，とにかく，人間は，イエス・キリスト以前には，自分がどういう状態にあるのか，自分は偉大なものか，卑小なものかを知らなかったからである。このどちらか一方のことを言った人たちも，その実，何も知らなかったので，ただ理由もなく，偶然に言い当てたにすぎない。しかも，残りの一方をすててかえりみなかったので，いつも迷ってばかりいた。／「あなたがたが知らずに求めているものを，宗教はあなたがたに告げ知らせる」。》(Le pyrrhonisme est le vrai. Car, après tout, les hommes, avant Jésus-christ, ne savaient où ils en étaient, ni s'ils étaient grands ou petits. Et ceux qui ont dit l'un ou l'autre n'en savaient rien, et devinaient sans raison et par hasard; et même ils erraient toujours on excluant l'un ou l'autre. / *Quod ergo ignorantes quaeritis, religio annuntiat vobis.*)

この fr. が19の分類項目に属する理由は，前出の(7)La. 293-Br. 394 の所属理由と，同様である。

(10) La. 296-Br. 51 について。——《強情者のかわりに，ピュロンの徒を。》(Pyrrhonien pour opiniâtre.)

本断章も，直前の断章 (La. 295-Br. 432) にかんする配分理由と同様であり，19の「哲学者たちの考え」のうちに入る。

(11) La. 297-Br. 78 について。——《無用で，不確実なデカルト。》(Descartes inutile et incertain.)

この断章の内容は，デカルトの神に関する人性論的証明に対する，パスカルの批判を示すものである。デカルトは，言う迄も無く哲学者であるから，この fr. は19に所属する。

(12) La. 298-Br. 385 について。——《ピュロンの説——ここでは，一つ一つのものが，いくらか正しく，いくらか間違っている。まことの真理というものは，こんなものではない。それは，純粋そのものであり，真実そのものである。こんなふうにごたまぜでは，真理はそこなわれ，ほろびる外はない。どんなものでも，純粋に真実なものはない。したがって，真実ということを，純粋な真実の意味にとるならば，どんなものも真実ではない。殺人が悪だということは真実ではないか，という人があるかもしれない。そのとおりだ。悪とか虚偽はわたしたちもよく知っているからである。しかし，何が善であるかを言うことができるであろうか。童貞を守ることだろうか。ちがうと，わたしは言いたい。そんなことをすれば，人間がたえてしまうかもしこない。結婚だろうか。やはり，ちがう。禁欲の方がもっとよい。人を殺さないことか。いや，おそろしい無秩序が起こって，悪人が善人をみな殺しにしてしまうかもしれない。それなら，人を殺すことか。いや，そんなことをするのは，自然の破壊だ。わたしたちは，真実も善も部分的にしか持てない。悪や虚偽の入りまじったままでしか，持てない。》(Chaque chose est ici vraie en partie, fausse en partie. La vérité essentielle n'est pas ainsi ; elle est toute pure et toute vraie. Ce mélange la déshonore et l'anéantit. Rien n'est purement vrai : et ainsi rien n'est vrai, en l'entendant du pur vrai. On dira qu'il est vrai que l'homocide est mauvais ; oui, car nous connaissons bien le mal et le faux. Mais dira-t-on qui soit bon? La chasteté? Je dis que non, car le monde finirait. Le mariage? non : la continence vaut mieux. De ne point tuer? Non, car les désordres seraient horribles, et les méchants tueraient tous les bons. De tuer? Non, car cela détruit la nature. Nous n'avons ni vrai ni bien qu'en partie, et mêlé de mal et de faux.)

この fr. が分類項目19に属することは，タイトルから言って，明白であるが，次に玆でこの断章の背景を少しく探って見度い。ところで，この断章の内容は，《ピュロンの説》(Pyrrhonisme) の主張を，パスカルが pyrrhonien の立場

に立って，解説したものであるが，La. 213-Br. 392 および La. 293-Br. 394 と密接な連関を有している。而して fr. La. 213-Br. 392 は，次の如くである〔La. 293-Br. 394 は，既出〕——《ピュロンの徒に反対して——……わたしたちは，だれもがそれらを同じように理解しているものだと想像している。しかし，そんなことは単なる想像で，なんの根拠もない。その証拠は一つもないのだからである。もちろん，わたしも，こういった言葉が同じような状況において用いられることがあるのは，よく承知している。また，ある物体が位置をかえるのを二人の人が見ている場合，この二人とも，当の対象が目にうつるさまを同じ言葉で表現し，どちらも，「それは動いた」と言うことも知っている。こんなふうに言い方が同じなので，考え方まで同じであろうという有力な推定がそこから引き出される。この点については，その通りと賛成しておく方がどうやら分がありそうだが，最後的な確信をもって頭から信じ切ってよいかというと，そうでもない。それぞれにちがった前提から同じような結果が引き出されることがあるのは，だれも知っている通りだからである。／さて，この点だけをもってしても，少なくとも問題をこんがらせるのに十分である。もちろんこういった事柄を，わたしたちに認めさせる自然の光が，このためにすっかり消え去ってしまうわけではない。アカメディア派の人たちならば，賛成の方についたかもしれない。しかし，自然の光は，このために曇り，独断論者は動揺し，ピュロン派が栄誉をかちとることになる。ところで，ピュロン派の本質はこういう曖昧な曖昧さと，ある種の疑わしい暗さのなかにある。といっても，わたしたちの疑いがすべての光を除き去ることはできず，また，わたしたちの自然の光があらゆる暗黒を追いはらうこともできない。》(*Contre le pyrrhonisme.* ——……Nous supposons que tous les conçoivent de même sorte ; mais nous le supposons bien gratuitement, car nous n'en avons aucune preuve. Je vois bien qu'on applique ces mots dans les mêmes occasions, et que toutes les fois que deux hommes voient un corps changer de place, ils expriment tous deux la vue de ce même objet par le même mot, en disant l'un et l'autre, qu'il s'est mû ; et de cette con-

formité d'application on tire une puissante conjecture d'une conformité d'idées ; mais cela n'est pas absolument convaincant de la dernière conviction, quoiqu'il y ait bien à parier pour l'affirmative, puisqu'on sait qu'on tire souvent les mêmes conséquences de suppositions différentes. / Cela suffit pour embrouiller au moins la matiére : non que cela éteigne absolument la clarté naturelle qui nous assure de ces choses ; les académiciens auraient gagé ; mais cela la ternit, et trouble les dogmatistes à la gloire de la cabale pyrrhonienne, qui consiste à cette ambiguïté ambiguë, et dans une certaine obscurité douteuse, dont nos doutes ne peuvent ôter toute la clarté, ni nos lumières naturelles en chasser toutes les ténèbres.)

この fr. の内容は，《ピュロンの徒》も《独断論者》(les dogmatistes) も，《われわれの自然の光》(nos lumières naturelles) 即ち理性の立場に終始する限り，部分的真理に到達しうるに過ぎないというのが，パスカルの見地である。以下パスカル自身の立場を顧ることによって，以上を確認することにし度い——《第二部　信仰のない人間は，真の幸福も，正義も知ることができないということ。》(Seconde partie. Lue l'homme sans foi ne peut connaître le vrai bien, ni la justice.) (La. 300-Br. 425)。かようにパスカルは，《信仰》(foi) 即ちキリスト教的信仰の立場に立つことによって，理性を唯一の根拠とするピュロン派や独断論の立場を批判するのである。次の二断章は，パスカルの見地を明白に物語るものである——《こころには，理性の知らない独自の正しい感覚がある。このことは，多くの事実において認められる。こころが普遍的存在をおのずと愛するようになるのも，自分自身をおのずと愛しているのも，どれだけこころがそこに傾倒しているかにかかっているのだと，わたしは言いたい。……》(La coeur a ses raisons que la raison ne connaît point ; on le sait en mille choses. Je dis que le coeur aime l'être universel naturellement, et soi-même naturellement selon qu'il s'y donne ; ……) (La. 224-Br. 277) ;《神を感じるのは，こころであって，理性

ではない。信仰とはそういうものなのだ。理性にではなく，こころに感じられる神。》(C'est le coeur qui sent Dieu et non la raison. Voilà ce que c'est que la loi : Dieu sensible au coeur, non à la raison.) (La. 225-Br. 278)。

(13) La. 303 (20)-Br. 74 について。——《哲学者たちにとっては，二百八十もの最高の幸福。》(Pour les philosophes, deux cent quatre-vingt souverains biens.)

この fr. は，《pour philosophes》という語句があるので，19の「哲学者たちの考え」のうちに入る。

(14) La. 394 (27)-Br. 431 について。——《ほかの人たちはだれでも，人間がもっともすぐれた被造物であることを知らなかった。一部の人々は，人間がすぐれているという現実をよく知っていたので，人間が生まれながらにして自分自身のことで卑下した気持をいだいているのを，弱気であり，無意味なことと考えた。また，別な人々は，こういう下劣さがどこまでも事実に即したものだということをよく知っていたので，同じように人間が生まれつき持っている偉大さの感情を，こっけいな思い上がりときめつけた。／一方の人たちは言う。神にむかって，あなたの目をあげなさい。あなた自身を自分に似せてつくった者，自分をあがめさせるために，あなたをつくった者を見なさい。あなたは，その者と同じようになることができる。あなたがその者に従うつもりなら，知恵があなたをその者とひとしくするであろう。「自由な人間たちよ，頭をあげよ」とエピクテートスは言う。ところが，もう一方の人たちは言う。おまえの目を地面の方へ下げろ。卑しい虫けらにすぎぬおまえたち。おまえの仲間であるけだものどもをながめよ。／一体，人間はどうなるのか。神にひとしくなるのか。けだものにひとしくなるのか。なんとまあ，おそろしいようなちがいであろう。一体，わたしたちはどうなるのか。このようなことを見て，思わない人がいるだろうか。人間はさ迷っている。人間は自分の場所から転落し

た，人間はもとの場所を不安そうにさがし求めている。人間はそれをもう二度と見つけることができないでいるのだと。それでは，人間をそこへ向かわせるのはだれだろうか。もっとも偉大な人たちですら，それができなかった。》(Nul autre n'a connu que l'homme est la plus excellente créature. Les uns, qui ont bien connu la réalité de son excellence, ont pris pour lâcheté et pour ingratitude les sentiments bas que les hommes ont naturellement d'eux-mêmes ; et les autres, qui ont bien connu combien cette bassesse est effective ont traité d'une superbe ridicule ces sentiments de grandeur, qui sont aussi naturels à l'homme./Levez vos yeux vers Dieu, disent les uns ; voyez celui auquel vous ressemblez, et qui vous a fait pour l'adorer. Vous pouvez vous rendre semblable à lui ; la sagesse vous y égalera, si vous voulez le suivre. 《Haussez la tête, hommes libres》, dit Epictète. Et les autres lui disent : Baissez vos yeux vers la terre, chétif ver que vous êtes, et regardez les bêtes dont vous êtes le compagnon. / Que deviendra donc l'homme? Serat-il égal à Dieu ou aux bêtes? Quelle effroyable distance ! Que serons-nous donc? Qui ne voit par tout cela que l'homme est égaré, qu'il est tombé de sa place, qu'il la cherche avec inquiétude, qu'il ne la peut plus retrouver? Et qui l'y adressera donc? Les plus grands hommes ne l'ont pu.)

この断章は，《被造物》(créature) たる人間と，神および《けだもの》(bêtes) との関係という哲学的問題を扱っている。そうして古代の哲学者《エピクテートス》(Epictète) の名が挙げられている以上，当然乍ら分類項目の19中に分類しうる。

(XLII 回了)